

CCGA 現代グラフィックアートセンター企画展
「パスワード:日本とデンマークのアーティストによる対話」

企画趣旨

対話すること。それは人間が社会の中で共に生きていく上で欠かせない営みです。グローバル化による新たな時代が到来し、国境や地域を越えて交流や情報の流通が活発になり、異文化と出会う機会もますます増えている今日、異なる背景をもつ人々とのような対話を交わしながら、どの部分に共感や相違を認め合っていくかを考えることは、21世紀の大きな課題といえるでしょう。

このような社会状況を反映するように、今日の美術においても同様の議論が盛んになされています。すなわち、作者個人の内的探求のみで作品を制作するという従来の美術のあり方ではなく、他者との関係を制作の中に取り込む新たな方法論の模索です。そこには、未知のものとの対話を通して、美術により開かれた構造をもたらすことができるのでは、という問いかけがあります。

デンマークと日本の現代アーティストそれぞれ5人によるこのプロジェクトは、このような対話をめぐる問題について実践を通して考えるため、5年前に企画されました。「ブラインド・デート」と題されたそのプロジェクトは、キュレーターが選考した互いに全く面識のない両国のアーティストが、電子メールなどを持ちいて一対一で対話することから始まりました。他人どうしの5組のペアーは手探りで対話をつづけながら意見を交換し、最終的に10日間の共同制作を行ない、その成果をオデンセ市美術館で2002年に開催された展覧会で発表しました。

それから2年後となる本年、デンマークと日本の同じペアー5組が、再度、日本で新たな共同制作を行ないます。今回のプロジェクトでは、5組のペアーが対話を進める上で鍵と考える「パスワード」をそれぞれ設定し、共同制作を試みます。展覧会では、これら5つのパスワードを通して、彼らが対話において、まさに今何を重視しているのかを展覧していきます。

対話の概念は人によって様々です。その対話の捉え方の相違こそ、それぞれの人間関係についての価値観や、その人を取り巻く社会状況を照らし出すはずです。今回のプロジェクトにおいても、参加アーティストが対話について考えていく過程で、各作家個人の価値観はもとより、デンマーク的な特質、日本的な特質、あるいは互いの類似性などがあらわれてくるかもしれません。対話を通して浮かび上がってくるそれらの発見を、各アーティストが敏感に捉え、自らの立場を相対的に見つめ直しながら共同制作を行い、さらには美術表現の新機軸を未来にむけて問いかけていくことがプロジェクトの主旨といえます。

日本から遠く離れた北欧に位置するデンマーク。先進的な社会制度や優れたデザインの伝統などをもつデンマークは、1990年代半ば以降、美術の分野で急速に世界的な注目を集めるようになっていきました。この展覧会は、その先鋭的なデンマークのアーティストと日本のアーティストによる、実に5年越しのプロジェクトの集大成となります。単に美術の新たな試みとして意義があるだけでなく、他者を通して自己を再認識する対話精神が求められている21世紀の私たちにとって、示唆に富むケース・スタディとなることでしょう。

1. 展覧会名 パスワード:日本とデンマークのアーティストによる対話
PASSWORD: A Danish/Japanese Dialogue
2. 会場 CCGA 現代グラフィックアートセンター
〒962-0711 福島県須賀川市塩田宮田1
Tel: 0248-79-4811 Fax: 0248-79-4816 E-mail: ccga-info@mail.dnp.co.jp
3. 会期・開館時間 2004年6月19日(土)--9月12日(日) 10:00--17:00(入館は16:45まで)
4. 休館日 月曜日(祝日にあたる場合を除く)、祝日の翌日(土日にあたる場合を除く)
5. 観覧料 一般300円/学生200円
小学生以下、65才以上、および障がい者手帳をお持ちの方は無料
6. 主催 大日本印刷CCGA 現代グラフィックアートセンター
7. 後援 駐日デンマーク大使館
8. 助成 デンマーク芸術財団
9. 企画 CCGA 現代グラフィックアートセンター/アネット・ホイランド/大友恵理/平野 到
10. 交通 JR水郡線・小塩江駅より無料送迎車あり(要電話申込)
JR東北本線・須賀川駅よりタクシー20分
JR東北新幹線・郡山駅よりタクシー30分/東北自動車道・須賀川ICより車20分
11. 問い合わせ CCGA 現代グラフィックアートセンター 〒962-0711 福島県須賀川市塩田宮田1
Tel: 0248-79-4811 Fax: 0248-79-4816 E-mail: ccga-info@mail.dnp.co.jp
12. 参加アーティストとコラボレーションの組み合わせ
- | (日本) | | (デンマーク) |
|-----------------------|---|--------------------------------|
| 井口大介 Daisuke Iguchi | = | ソーレン・マルティンセン Søren Martinsen |
| 高島陽子 Yoko Takashima | = | ニコライ・レック Nikolaj Recke |
| 楽 Gaku | = | カスパー・ボネン Kasper Bonnén |
| 豊嶋康子 Yasuko Toyoshima | = | カティヤ・ザンダー Katya Sander |
| 富田俊明 Toshiaki Tomita | = | オーサ・ソーニャスドッター Åsa Sonjasdotter |

参加アーティスト紹介

●井口大介(1958年生、神奈川県在住)

1982年多摩美術大学絵画科油絵専攻卒業。1992-94年ベルリンで制作。80年代から絵画を中心に作品を発表。日本の歴史や社会に内在している様々な矛盾やヒエラルキーに対する批評的視点を持ち、アーティストとして今日の社会状況に対し、どのような立場で関わり、制作するべきかという問題を真摯に問いかけながら制作をつづけている。主な展覧会:今日の作家展「コンセプチュアリズムの新たな展開」(横浜市民ギャラリー、1999年)、個展(文房堂ギャラリー、1998年)、VOCA展1996(上野の森美術館、1996年)他。

●ソーレン・マルティンセン Søren Martinsen (1966年生、コペンハーゲン在住)

デンマーク王立アカデミーとロンドン大学附属ゴールドスミス校に学ぶ。ニューヨークのビル街の空き地に作られているコミュニティ・ガーデンや世界各地のコミュニンのフェスティバルなど、現代におけるユートピア思想を題材にしたビデオや写真などを制作。作品には、現実や日常から逸脱していくもう一つの世界が捉えられている。その優れたビデオ作品はヨーロッパで非常に高く評価され、今日のデンマークを代表するビデオ・アーティストの一人である。

デンマークでのコラボレーション作品

井口とマルティンセンは、ニューヨーク貿易センタービルのテロに対する印象などを発端にした巨大な絵画を共同制作した。現地での制作は、メモ用紙にイメージや文字を大量に書いて交換しながら進められ、二人の対話の過程を示すかのように、そのメモ用紙も壁面いっぱいに展示された。ロール状に巻くことのできる横長の巨大なキャンバスには、現実社会を飲み込む巨大な魚、逃げていくような妖怪などが断片的に描かれ、現代社会の情勢を諷刺する絵巻物ともいえる世界が展開している。



●高島陽子（1961年生、カナダ在住）

90年代前半よりカナダを拠点に国際的に活動している。食事、入浴、歯をみがく等、日常生活から反復的行為を抽出し、映像インスタレーションや写真などを制作する。作者が「儀式」と呼ぶこうした反復行為は、本来の目的こえて、私たちが共有する根源的なもの（快樂、強迫観念、生への執着、死への恐怖等）を暗示させる。主な展覧会：Endsville (ICC, 2002)、低温火傷（東京都現代美術館、2000）、個展/クリテリウム38（水戸芸術館、1999）、Out of this century (Vancouver art Gallery, 1999)、Conceal/Reveal (SITE Santa Fe, 1996) 他。

●ニコライ・レッケ Nikolaj Recke (1969年生、コペンハーゲン在住)

デンマーク王立アカデミーに学ぶ。レッケは過去の現代美術の有名な作品、あるいは伝統的な迷信といったものを契機に制作を行う。例えば有名なイヴ・クラインのボディ・ペインティングを自分なりに再演したり、あるいは幸運を導くと言われる四葉のクローバーを観客に探してもらうプロジェクトなどを行ったりしている。既存の表現や習慣の追体験を通して、そこに関わる作者や観客が自らを再発見することが目論まれる。1999年のニュー・ライフ展など、何度か日本にも紹介されている。

デンマークでのコラボレーション作品

レッケと高島の共同制作作品「空飛ぶ家」における主な関心は、夢、そして幸福にあった。日常や現実を抱えながらも自由でありたいと望みをかなえるプランとして、この「空飛ぶ家」のアイデアが生まれた。二人は夢を実現すべく、ミニチュアのマイ・ホームをのせて飛ぶことが出来るラジコン模型飛行機をそれぞれ完成させた。残念ながらそのフライトは悪天候により未完に終わったが、このファンタジーの実践は、かえっていっそういとおしいものとしてビデオインスタレーションに立ち現れている。



●楽（1974年生、東京／ニューヨーク在住）

東京造形大学とCCA北九州に学ぶ。日常生活に内在するシステムや人との関係に目をむけ、その状況を詩的あるいはクールな視線で、様々なメディアを通して描写する。1999年よりコラボレイティブ・ユニット「gansomaeda」を渡辺郷とともに展開。またCandy Factory他のアーティストとのコラボレーションも多数。主な展覧会：25hrs (El Raval Sports Pavilion, 2003)、Art Camp in Nakatsue (中津江村、2002)、Young Video Artists Initiative (THINK ZONE, 2002)、Take Me Out of The Festival (Candy Factoryとのコラボレーション／横浜トリエンナーレ、2001)、FLYING FOX (Candy Factory, 2000)

●カスパー・ボネン Kasper Bonnén (1968年生、コペンハーゲン在住)

空間や場所に個人がどう関わるかという点を浮き彫りにするプロジェクトを展開。プロジェクトはしばしばコペンハーゲン市長までをその過程に巻き込むような社会的広がりを持ち、個人と社会、私的と公的、主観と客観を往復する視点が常に存在している。作品は絵画、ドローイング、オブジェ、文字によるテキスト、そしてそれらを組み合わせたインスタレーションと多岐にわたる。このように形式を逸脱しながら、様々な表現を自由自在に横断する複合性を尊重していることもボネンの特徴である。

デンマークでのコラボレーション作品

全く見知らぬ相手を、コンピューターを通して“覗き見る”という二人の関係が、実際に両方で交わした電子メール、画像、デジタルムービーなどによって展示空間に再構築された。展示空間を二つに区切り、それぞれの部屋に設置されたコンピューターから映像やテキストが壁に開けられた穴を通して隣のパートナーの部屋へ投影される。



●豊嶋康子（1967年生、埼玉在住）

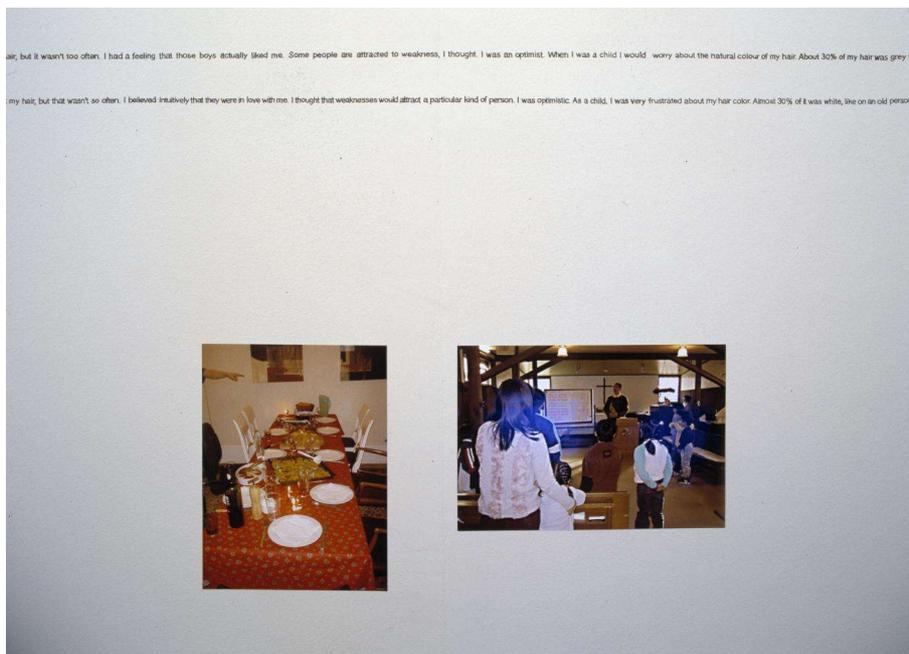
1993年東京藝術大学大学院卒。株式購入や銀行口座開設など社会上の実際のシステムを利用したり、あるいは日常の身近なモノに変化を加えることで、そこに内在し知らず知らずのうちに私たちを支配しているシステムなどを露呈させる。主な展覧会：VOCA展2004（上野の森美術館、2004）、she_story_loop（京都ドイツ文化センター、2003）、Artist Initiative Links in 2001 PUDDLES (Kunstlerhaus Dortmund and Cuba Kultur, 2001)、個展/クリテリウム25（水戸芸術館、1997）、アート・トゥデイ（セゾン現代美術館、1990年）他。

●カティア・ザンダー Katya Sander（1970年生、コペンハーゲン在住）

デンマーク王立アカデミーで建築と美術を学ぶ。建築空間や場所をテーマにしたプロジェクトを多く手がける。それらは社会的ルールや慣習などにもふれながら、公と私、内側と外側、見る者と見られる者といった既存の対立の構図を一旦狂わせ、人間と場所の意外な関係を導いていくものである。ホイットニー美術館のレジデンス・プログラムに招聘されるなど、北欧の若手女性作家として国際的に注目を集めている。

デンマークでのコラボレーション作品

展示空間を囲うように壁面を走る2行の英文は、元は同じ一つの文章である。豊嶋とザンダーは、交わした電子メールを元に作成した一つの文章を、まずそれぞれの母国語に自ら訳し、次に翻訳家に依頼して再び英文に変換した。出来上がった二つの文章は、よく似ているものの全く同じという訳ではない。そこに、物事が受け手と結びつき、差異やねじれを伴って受け入れられることが見て取れるだろう。また文章に合わせて二人が属するそれぞれの日常から選ばれたイメージが添えられ、一つの物語に対して微妙に異なる二つの世界が広がる。



●富田俊明（1971年生、神奈川県在住）

1996年東京藝術大学大学院美術研究科壁画専攻卒業。内面に抱く記憶やイメージ、思考をたどり叙述する。そんな自分自身との対話に基づいて綴られた文章による作品を制作。あるいは作家と他者との対話から生まれる共有されたイメージや言葉によるインスタレーションを手掛ける。他者へのインタビューという作業が自ずとインタビュアーである自分の内面世界を形象化する。主な展覧会：国際芸術センター青森（2003）、「泉の話」（横浜トリエンナーレ、2001）、「THE Other Exiles／エグザイル（越境者）のように」（ギャラリーアセン、1997）、「ONEDAY ONESHOW」（ギャラリー360°、1996）他。

●オーサ・ソーニャスドッター Åsa Sonjasdotter（1966年生、コペンハーゲン在住）

スウェーデン出身。ノルウェーのトロンヘイム・アカデミーとデンマーク王立アカデミーに学ぶ。彼女のプロジェクトの多くは、ある状況の中で人間の行為や心理的反応、意志疎通などが如何に為されるかを観察するというものである。例えば、2人の人が親しさを共有するため、どこまで身体的接触を許容できるかを実演させた「Shall I touch him? Yes」などのプロジェクトは、その一例である。作者自らこういった制作を「ポエティック・ジャーナリズム」とよぶように、現象を詩的に捉えて提示するというコンセプトが内在している。

デンマークでのコラボレーション作品

富田とソーニャスドッターの作品は、プロジェクトにおける二人の経験を言葉通り“ブラインド・デート”（全く知らない相手とデートをする）になぞらえ、展覧会を訪れた人にそれをカセットテープなどを通して追体験してもらうものである。偶然会場に居合わせる人々にひとときを共有してもらうために、二人はサインを添えて次のようなメニューを用意した。「偽りの自己紹介」、「物語を話す」、「クッションに座り、地元美術学校で行われた“物語の夜”での物語を聞く」、「お茶をいただく」、「壁に吊った本を読み、物語を共有する」、「あなたの経験をゲストブックに書く」。

